

# 発達特性に応じた指導方法に関する研究

## ー アセスメントを基にした指導の充実をめざして ー

主 幹・指導主事 小嶋加津美  
主 幹・指導主事 清水 龍大  
主 査・指導主事 樋川 陽子  
副主査・指導主事 坂本 久美

キーワード 発達特性 アセスメント 指導方法

### I 主題設定の理由

平成 24 年度文部科学省の調査によると、小中学校の通常の学級に在籍する児童生徒の中で「学習面又は行動面で著しい困難を示す割合」が 6.5%で、「行動面で著しい困難を示す割合」は 3.6%、「学習面と行動面ともに著しい困難を示す割合」は 1.6%という結果が示され、通常の学級においても特別支援教育やユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導・支援が必要とされる状況が報告された。しかし、行動面に困難を抱える児童生徒について、「指導上課題となるような行動が見られる」「学校生活につまづきがある」「一斉指導による集団活動に参加しにくい」などの目に見える行動課題は捉えられ指導が行われていても、行動の背景にある困難さの要因までは検討されない場合も多く、適切な指導・支援につながっていきづらい現状が考えられる。

令和元年度から令和 2 年度までの 2 年間の研究では、「学習障害等のある児童生徒への支援の充実に関する研究」というテーマのもと、学習面に困難を抱える児童生徒の実態把握とその特性に応じた指導の在り方について研究を行い、以下のような成果が得られた。

- ・児童生徒の学習における困難さを改善するために、状況の分析において、児童生徒の観察に加え、その困難さを客観的に確認するためのチェックリストやアセスメントツールの活用が有効であることが分かった。
- ・学習の困難さの背景にある要因が詳しく分かると、困難さに応じた指導方法や教材・教具について検討でき、よりよい指導・支援につなげることができると考えられる。

一方、今後取り組むべき課題としては、以下のような点があげられた。

- ・これまでの研究で活用したツールや困難さに応じた指導・支援方法、教材・教具の例についての情報発信。
- ・児童生徒の行動面での困難さの背景を適切に実態把握するための手法の検討。
- ・行動面の困難さに対する適切な指導・支援方法の検討。
- ・発達特性を理解し、適切な対応ができるための教員の資質向上。

また、研究協力校では、通常の学級における、行動面の課題に対する指導・支援についての研究ニーズが高かった。

これらのことから、特に行動面に困難を抱える児童生徒の状況を適切に把握し、その特性に応じた効果的な指導方法の在り方について検討することが必要であると考え、本主題を設定した。

なお、本研究における「発達特性」とは、「発達障害の特性」を指すものとする。

### II 研究の目的

発達特性のある、特に行動面に困難を抱える児童生徒に対して適切にアセスメントを行い、発達特性に応じた指導の在り方について検討することにより、通常の学級における学級指導の充実を図る。併せて、発達特性に応じた指導方法の具体例を山梨県内に広く周知することにより、多くの学校の様々な指導場面における実践に広められるようにする。

### Ⅲ 研究の方法

本研究は令和3年度から令和4年度までの2年計画で進めていく。2年間を通して、研究協力校となる県内の小学校に協力を依頼し、通常の学級に在籍する、特別な教育的支援を必要とする児童の実態把握や指導・支援の在り方について検討する事例研究を行う。また、協力校の全教員を対象に「発達特性の理解」や「発達特性に応じた指導方法」に関する校内学習会を行う。

#### 1 令和3年度（1年次）の研究

- ・特別な教育的支援を必要とする児童生徒の困難さや発達特性を捉えるための「児童・生徒理解のためのシート」（以下、「チェックシート」という。）の内容を検討・作成することで、より客観的で多面的・多角的な実態把握ができるようにする。
- ・通常の学級から1学級を抽出し、授業観察や学級担任からの聞き取りをもとに学級の取組状況や指導上の課題を把握した後、事例研究の対象児童を数名選定する。
- ・授業観察や学級担任をはじめとする関係教員からの聞き取りに加えて、チェックシートを活用することにより、対象児童の困難さを把握・整理する。
- ・実態把握をもとに個々の困難さの背景要因を探り、それに応じた指導・支援の検討・提案・検証を行う。その指導・支援事例を記録し、蓄積する。
- ・全教員を対象にアンケート調査を実施し、その結果を分析する。
- ・全教員を対象に、子供の発達特性について理解を深めるための校内学習会を実施する。

#### 2 令和4年度（2年次）の研究（予定）

- ・特別な教育的支援を必要とする児童生徒の困難さや発達特性を捉えるためのチェックシートを、県内の各学校で活用できるように広く周知する。
- ・事例研究を継続しながら、行動面の困難さに応じた指導・支援事例の記録をさらに蓄積する。
- ・1年目から蓄積した指導・支援事例について、発達特性ごとに整理・分類する。
- ・発達特性に応じた指導・支援事例集を作成し、県内の各学校で活用できるように広く周知する。

- ・全教員を対象に、子供の発達特性に応じた指導・支援の方法について提案するための校内学習会を実施する。
- ・全教員を対象にアンケート調査を実施し、昨年度からの変容等を見取る。

### Ⅳ 研究の実際

#### 1 研究協力校における事例研究

##### （1）概要

はじめに、協力校の通常の学級から1学級を抽出し、授業観察や学級担任からの聞き取りをもとに、学級の取組状況や指導上の課題について把握した。

次に、その学級に在籍する児童の中で、行動面に課題が見られ、特別な教育的支援が必要であると考えられる児童3名を対象として、観察や詳細についての聞き取りを行い、それぞれの児童の授業への取り組み方や人との関わり方等の様子について確認した。

さらに、対象児童の困難さを多面的・多角的に把握するためにチェックシートを活用し、関係教員3名が記入したチェックシートの結果を分析した。

授業観察や聞き取り及びチェックシートの結果をもとに困難さの背景要因等を見立て、指導・支援内容や方法の検討と実践を重ねた。その際、山梨大学のアドバイザーの先生にも助言をいただきながら、学級担任をはじめとする関係教員全員で情報共有し、指導に生かすようにした。

その後、学級担任から、研究を通して参考になった指導・支援方法や、児童の学級での様子や変容等について聞き取り、検証を行った。

##### （2）学校訪問の経過

本年度の協力校への訪問及び支援の経過は、以下のとおりである。授業観察後の聞き取りや話し合いは、訪問日の放課後にオンラインで行った。

3月17日（水）

- ・研究についての事前打合せ

4月21日（水）

- ・本年度の研究の方向性や研究計画についての打合せ

6月3日（木）

- ・授業観察（算数、道徳）

- ・学級の様子や指導上の課題等の聞き取り，対象児童の決定，対象児童についての聞き取り  
6月30日（水）
- ・授業観察（国語，体育）
- ・対象児童の個別の指導計画等の確認，対象児童の様子や指導上の課題に対する指導・支援の検討  
7月19日（月）
- ・授業観察（国語，算数）
- ・対象児童の様子や指導上の課題に対する指導・支援の検討  
10月14日（木）～11月4日（木）
- ・チェックシートへの記入  
11月17日（水）
- ・授業観察（算数，音楽）
- ・チェックシートの結果からの読み取り内容の報告，対象児童の様子や指導上の課題に対する指導・支援の検討  
1月11日（火）
- ・対象児童の様子や変容等についての聞き取り  
1月26日（水）
- ・今年度の研究のまとめと振り返り

### （3）チェックシートの作成

児童生徒のつまずきの背景を探り，適切な指導・支援の在り方を考えるためには，学級担任やチームティーチングを行う補助教員，支援員，特別支援学級担任，通級指導教室担当者が協力して児童生徒の困難さを整理し，把握することが大切である。

そこで，本研究においては，学級担任等が児童生徒の困難さに気づき支援につなげていくためのツールとして，平成24年に文部科学省により実施された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」（令和4年にも同様の調査を実施中）で使用された質問項目等を参考にチェックシートを作成し，用いることとした。（図1）

「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」で使用された質問項目からは，学習面の「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」の6つの領域について，また，行動面の「不注意」「多動性・衝動性」「コミュニケーション」「人との関わり」「興味関心・こだわり」「その他」の6つの領域について，

どの領域における困難さが大きいかを把握することができる。したがって，児童生徒の特性を大まかに整理して捉えることができ，その上で，課題となる行動の背景要因を検討し，その改善のための指導・支援につなげていくことができると考えられる。また，複数の教員でチェックすることにより客観性が高まり，児童生徒の実態を多面的・多角的に把握することができると考えられる。

チェックシートは，表計算ソフト(Microsoft Excel)を用いて作成した。質問項目について評価点を選択すると領域別に合計点が算出され，グラフ化できるようにしている。そのため，児童生徒の特性や支援を必要とする領域について，視覚的に捉えることもできる。また，児童生徒への理解を深められるように，児童生徒の基本情報，すなわち，生育歴や関係機関，本人・保護者の思い，現在の校内支援状況，その他前述の質問項目に含まれていない感覚過敏等の有無や本人の得意とすること・がんばっていることなどについて記述する欄も加えた。

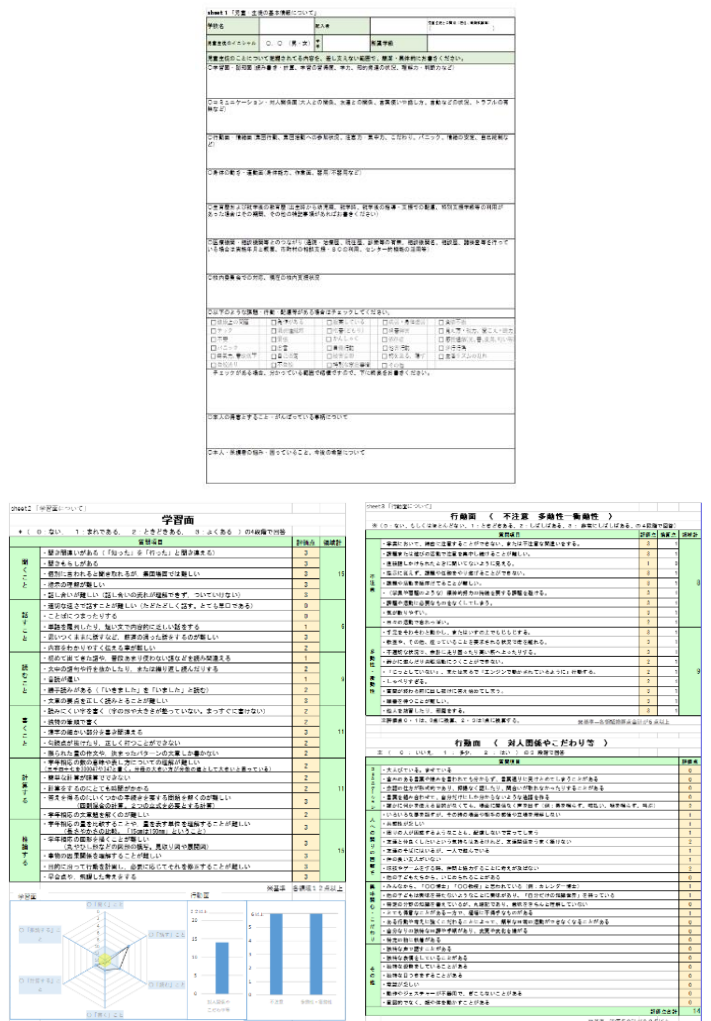


図1 チェックシート

#### (4) 困難さに対するアセスメント

対象児童3名について、授業観察や聞き取り、チェックシートの活用から考えられる困難さは、以下のとおりである。

##### ア 授業観察・聞き取りより

###### (ア) A児

- 一度にたくさんの視覚情報を与えられると、どこを見ればよいか分からず、混乱してしまう。
- 自分の並ぶ位置が分からなくなることが多い。
- 教員の問いかけにすぐ反応して話したり、不安になると独り言を言ったりすることが多い。
- 朝の支度や学習の準備がスムーズにできない。
- 難しいと感じたときや気持ちが落ち着かないときに、奇声を発したり離席をしたりする。

###### (イ) B児

- 学習への意欲にムラがあり、集団の中では、指示や話を聞くことが難しい。
- 授業中の離席は減ってきているが、好きな本を読んでいることが多く、疲れたときなどは床に座り込んでいることもある。
- 教員や友達に注意されたことを素直に聞き入れられず、ふてくされたり意欲をなくしたりする。
- 遊びでは、自分の思い通りにならないと勝手にルールを変えてしまう。
- 運動が苦手で、自分の体をうまく動かすことができない。
- 整理整頓が苦手。

###### (ウ) C児

- ある程度の時間、着席して学習することや待つことが難しい。
- 不安なことがあったり、集中が切れたりすると離席する。
- 手いたずらが多い。
- 整理整頓が苦手で落とし物が多い。
- 一斉の指示では聞き逃しが多く、今言われたばかりのことを聞き返すことが多い。
- 自分の地区名や下校方法がいまだに言えない。

- 興味のあることに対しては積極的に発言するときもあるが、気分にもラがある。
- 愛着の形成に心配な面がある。

##### イ チェックシートの活用より

チェックシートへの記入は、学校生活の主たる指導者が複数の視点で捉えて行うようにする。今回の事例研究では、対象児童それぞれについて、学級担任、支援員、特別支援学級担任または通級指導教室担当者の3名がチェックシートへの記入を行った。

教員3名が記入した得点をもとに児童の困難さを整理・把握するために、困難があるとして教員が感じている領域に色をつけて比較するようにした。そして、色の重なる部分が多いほど困難さが大きいといえるのではないかと考えた。

(図2)

対象者( A児 )			
回答者	担任	支援員	特学担任
学習面 ※基準は各領域12点以上			
聞くこと	15	12	15
話すこと	6	8	7
読むこと	9		4
書くこと	11		
計算する	11	12	9
推論する	15	11	12
行動面 < 不注意 多動性・衝動性 > ※基準は各領域6点以上			
不注意	8	7	6
多動性・衝動性	9	8	9
行動面 < 対人関係やこだわり等 >			
コミュニケーション	2	3	2
人への関りの困難さ	9	8	
興味関心・こだわり	3	3	2
その他	0	6	2
合計	14	20	6

図2 学習面・行動面の領域別得点と困難さの読み取り

このようにして分析した結果から考えられる対象児童の困難さは以下のとおりである。

###### (ア) A児

- 学習面では、「聞くこと」「計算すること」「推論すること」の領域に困難さが見られる。
- 行動面では、「不注意」「多動性・衝動性」「人との関わり」の領域に困難さが見られる。

### (イ) B児

- ・学習面では、困難さが見られる領域はない。
- ・行動面では、「人との関わり」の領域に困難さが見られる。

### (ウ) C児

- ・学習面では、「聞くこと」「話すこと」「書くこと」「推論すること」の領域に困難さが見られる。
- ・行動面では、「不注意」「人との関わり」の領域に困難さが見られる。

今回は、学級担任、支援員、特別支援学級担任または通級指導教室担当者の3名が各自チェックシートへの記入を行った後、それぞれの得点を比較しながら児童の状況を把握した。それにより、一斉指導や集団活動での困難さと、個別指導での困難さとの違いに気付くことができるなど、児童の困難さを多角的に捉えることができた。

今後は、複数の教員の視点から捉えた児童像を考え合わせ、一つのシートにまとめて得点化することで、より客観性の高い結果を得られるようにしていく方向である。そのようにしてチェックシートを活用することで、児童生徒の困難さを関係教員で共有することができ、それが、チームティーチングによる授業等での連携した指導・支援につながると考えられる。

### (5) 行動面の困難さとその背景要因に応じた指導・支援

対象児童それぞれについて、アセスメントに基づいた指導・支援の検討と提案を学校訪問ごとに行った。そして、指導上の課題、すなわち、対象児童に見られた行動面での困難さに対して、考えられる背景要因と指導・支援例を課題ごとに記録・蓄積してきた。その一例を以下に示す。

#### ア 課題①

##### (ア) 指導上の課題

- ・授業中に立ち歩いたり、離席して教員の支援を求めたりする。

##### (イ) 考えられる背景要因

- ・気になるものや音等があると、自分の行動をコントロールすることが難しくなる。
- ・やるべきことが分からない。  
(聞き逃してしまった、忘れてしまった)

- ・課題が難しくて取り組むことができない。
- ・活動がうまくいかない。
- ・課題が早く終わってしまった。
- ・心配なことや困っていることがある。
- ・甘えたい気持ちや注目してほしい気持ちが強い。

##### (ウ) 指導・支援例

- ・視覚的、聴覚的な刺激をできるだけ少なくする。
- ・やることを板書したり実物を提示したりして示す。
- ・子供に合わせて課題の量や難易度を調整する。
- ・課題は、レベルや問題数を選べるように用意する。
- ・「離席せずに挙手をする」「ヘルプカードを出す」などのルールを示す。
- ・班編制や座席配置を工夫して、子供同士でのサポートを生かす。
- ・頑張っているときに、その場で褒める。
- ・休み時間など、授業以外の場面でも、たくさん言葉かけをする。

#### イ 課題②

##### (ア) 指導上の課題

- ・思いついたことや考えたことなどをすぐ口に出す。
- ・人の話を最後まで聞かずに自分の話を始める。

##### (イ) 考えられる背景要因

- ・視覚的、聴覚的な刺激に反応しやすい。
- ・状況判断をすることが難しい。
- ・発言のルールを意識できない。
- ・考えなどを頭の中にとどめておくことができない。
- ・甘えたい気持ちや注目してほしい気持ちが強い。

##### (ウ) 指導・支援例

- ・前列の中央等、刺激の少ない座席配置にする。
- ・発言のルールを皆で確認する。
- ・発言のルールを視覚的に提示して、思い出しやすくする。
- ・ルールに従うことによって、自分の思いは必ず聞いてもらえることを体験的に理解

させる（ルールに従った発言は取り上げ、ルールに従わない発言には反応しない）。

- ・「できた」「分かった」のアピールは、授業の補助に入る教員（以下、「T2」という。）が個別指導の中で褒めるようにする。

### ウ 課題③

#### （ア）指導上の課題

- ・興味のあるときだけ授業に参加し、それ以外は好きなことをしている。

#### （イ）考えられる背景要因

- ・集中できる時間が短い。
- ・自分の答えさえ出せば良いと思っている。
- ・友達の考えを聞くことに関心がもてない。
- ・説明をすることや説明を聞くことが苦手。
- ・自分の世界に入り込みやすい。
- ・切り替えに時間がかかる。
- ・学習や生活のルールは分かっているが、自分の気持ちをコントロールすることが難しい。
- ・課題に対する苦手意識が強い。

#### （ウ）指導・支援例

- ・参加できる場所では、本人の意見を拾い上げる。または、つぶやきを拾い上げて、発言につなげる。
- ・活躍の場（褒められる場・認められる場）を用意する。
- ・グループやペアでの話し合いでは、全員に役割を与える（話し方カード、進め方カードの活用）。
- ・T2が個別の支援に入ったときには、学習課題と一緒に取り組みながら手本を示す。
- ・T2は、授業者への注目を促すようにする。
- ・少し頑張ればできる課題から取り組み、成功体験を積み重ねる。

### （6）児童の変容

児童の困難さに応じた指導・支援方法を検討しながら実践を重ねてきたことにより、対象児童3名の様子に少しずつ変容が見られた。学級担任からの聞き取りによるそれぞれの児童の様子や変容は、以下のとおりである。

#### ア A児

- ・指示を端的に分かりやすく伝えることによりできることが増え、できたことをすぐに褒めることにより学習への意欲が高まった。
- ・友達にも認められたり褒められたりしたことが自信となって、大きな行事も乗り越えられた。
- ・テストの点数の付け方を工夫して本人の自己肯定感が高まるよう配慮したことで、気持ちが落ち着いた。
- ・周囲の様子に気付きにくいところはまだ課題であるが、少しずつ友達に対しても意識が向き始めている。

#### イ B児

- ・本人の興味や意欲に合わせて、参加できそうな場面では本人のやる気を引き出すようにすること（発表できそうな場面で指名する、班長等の役割を与える、できたことをすぐに褒めたり、皆の前で発表させたりするなど）で、授業に参加できる場面が増えた。
- ・授業の中で、友達に認められたり、友達が声をかけたりしてくれたことも、本人の意欲向上につながった。
- ・学校と家庭で連携を図りながら、「なぜそうしなければいけないのか」などの理由を本人に分かるように説明すると、以前はやろうとしなかったことも納得してできるようになった。

#### ウ C児

- ・活動の流れや作業手順を板書することで、やる事が分かって課題に取りかかることができるようになり、離席する姿は見られなくなった。
- ・板書によって学習や活動の見通しがもてたことは、本児にとっても、他の児童にとっても効果的だった。
- ・本人から友達との関わりを求める様子はまだまだあまり見られないが、授業においては友達のサポートが必要であり、友達の声かけが本人の気付きにつながっていると思われる。

また、対象児童3名に共通して、周りの友達からの賞賛や承認、サポートはとても有効な支援であり、特に学級担任一人による一斉指導においては、子供同士での助け合いを大切にすることが必

要であると考えられた。学級担任の振り返りでも、「友達に良い言葉かけをした子がいたときには、教師がその言葉を取り上げて、クラス全体で共有できるようにしたり、教師自身が子供たちへの『ありがとう』の言葉かけを大切にしたりすることにより、子供たちが互いに良いところを見つけ合ったり、助け合ったりする雰囲気が出ていった。」ということがあげられた。学級づくりや授業づくりにおける子供同士の相互理解や助け合い、学び合いの重要性を再確認することができた。

## 2 研究協力校における校内学習会

### (1) 概要

子供の発達特性を理解し、適切な対応ができるための教員の資質向上をめざして、協力校の全教員を対象に校内学習会を行った。また、学習会の内容を協力校のニーズに合ったものにするために事前にアンケート調査を実施し、先生方の特別支援教育に関する意識や指導上の悩み等を把握するようにした。経過は以下のとおりである。

6月30日(水)

- ・アンケート調査に向けての打合せ

7月19日(月)

- ・校内学習会の内容等についての打合せ

7月26日(月)～8月6日(金)

- ・アンケート調査の実施と回収

8月23日(月)

- ・校内学習会(オンラインに変更して実施)  
講師 山梨大学 吉井勘人准教授
- ・学習会の感想用紙への記入

### (2) 特別支援教育に関するアンケート調査

協力校のニーズに応じた学習会の実施をめざし、事前にアンケート調査を行った。調査内容としては、教員構成を把握するための、教職経験年数や特別支援教育に関する経験等についての質問項目に加えて、発達障害の傾向がある子供への具体的な指導・支援方法に関する知識やこれまでの経験、日頃の指導実践について記述回答を求めた。さらに、子供たちへの指導・支援において困っていることや悩んでいることについても、できるだけ具体的に記述することを依頼した。

先生方の回答から、発達障害の傾向がある児童への指導に関する悩みとしては、

- ・廊下を走る、大きな声を出すなどの自己中心的な行動に対して、どこまで注意すればよいのか、いつも迷う。
- ・他の子供と同じ空間で指導をしていると、どうしても待つことができずに急がせたり、時には叱ったりするなど、その子に応じた指導が必要だと分かっているにもかかわらずできないことが多い。
- ・疲れてくると癩癩を起こしてしまう子に、どのような言葉かけや対応をすればよいのか悩んでいる。
- ・自尊心が低いと感じる子供が多い。自尊心を高める関わりについて知りたい。

などがあげられており、発達障害の傾向がある児童に対して、その子供に合わせた指導が必要だと思っても、実際にはどのように対応すればよいのか悩んでいることが分かった。

また、周囲の児童や学級全体への指導に関する悩みとしては、

- ・周りの子供たちがその児童の特性を理解することは難しく、許容できないことがある。
- ・発達障害傾向のある子供の行動を見て、同じように行動してしまう子供がいる。発達障害傾向の子供を強く叱ることはできないが、他の子が流されないようにしていきたい。
- ・学級内において、発達に特性のある子供の活躍を認め、賞賛されるような活動や授業をどのように生み出せばよいか困っている。

など、周りの子供たちからの理解を得たり、互いに認め合い、助け合えるような関係をつくったりしていくにはどうすればよいのか悩んでいることも分かった。

### (3) 校内学習会

アンケート結果から分かった協力校のニーズに応じて、発達特性について理解を深め、先生方の困り感や指導上の悩みに添った情報提供を行うことを目的に校内学習会を行った。本研究チームのアドバイザーである山梨大学大学院総合研究部障害児教育講座の吉井勘人准教授に講師を依頼し、「発達特性の理解と指導・支援について～互いに認め合い、助け合える学級づくりをめざして～」というテーマでお話いただいた。(図3)発達障害をはじめとする様々な困難を抱える子供の視点に立ち考えることの大切さや、インクルーシブ教

育システムの構築を推進するための心構え、「社会・情動的スキル」を育み自尊感情を高める学級づくりのポイント、多様な学びを支えるユニバーサルデザインの授業づくりのポイントなどについて学びを深めることができた。

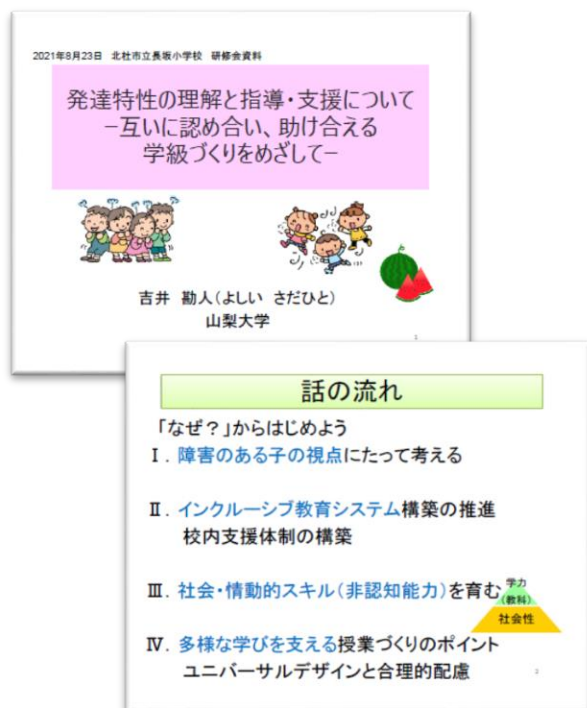


図3 学習会の資料（一部抜粋）

講義後の質疑応答では、子供への関わり方や学級づくり・授業づくりについての質問が積極的に出され、吉井准教授からは、今後の実践につながる具体的な指導・助言をいただいた。学習会後の感想には、様々な特性をもつ子供たちと関わる上で大切にしていきたい視点や指導・支援について学ぶことができ、それを2学期からの指導にすぐにも取り入れていきたいという先生方の思いが数多く寄せられた。学習会を通して、子供の発達特性と特性に応じた指導・支援の実際について、理解が深められたと考えられる。

## V 研究のまとめと今後の課題

本年度の研究では、児童の特性や困難さの整理・把握と行動面における困難さの背景要因の検討、そして、そのようなアセスメントに基づいた指導・支援の検討を、事例研究を通して行った。その成果としては、以下の4点があげられる。

・聞き取りや授業観察に加えて、行動面・学習面のチェックシートも活用しながら児童の実態把握

を丁寧に行うことで、行動の背景にある要因を考えやすくなり、子供の特性やニーズに応じた指導・支援方法を検討して提案することができた。

- ・学校訪問を行うごとに、先生方と共に指導・支援方法を検討し、それを実践に取り入れてもらった結果、子供たちの行動に変容が見られた。
- ・事例研究を通して、学級内で既に行われていた効果的な指導・支援について再確認し、共有することもできた。
- ・学習会を通して、子供の発達特性等に対する先生方の理解が深められた。

これらのことから、児童生徒の実態把握を丁寧に行い、課題となる行動や目に見える困難さの背景にある要因を見立てることは、よりよい指導・支援の在り方を検討し、実践することにつながると考えられる。そして、実践後の振り返りを通して、指導・支援を改善したり、状況をより詳細に分析したりすることの必要性も見えてくると考えられる。このようなサイクルで児童生徒の実態やニーズをより的確に把握し、よりよい指導・支援につないでいくことが、児童生徒の困難さの改善にもつながると考えられる。

また、児童生徒に関わる全ての教員が子供の発達特性について理解を深めることは、子供の行動の背景にある要因を見立てるための視点をもつことにつながり、さらには、特別支援教育やユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりや学級づくり、校内支援体制づくりにつながるのではないかと考えられる。

来年度に向けての課題としては、以下の3点があげられる。

- ・今年度は子供の困難さの解消に結び付くような指導・支援について、その内容や結果をできるだけ多く記録して蓄積することをめざしてきた。来年度は、その記録を発達特性ごとに整理・分類し直して、発達特性に応じた指導・支援方法をまとめて示すことができるようにしていきたい。
- ・事例研究で蓄積した指導・支援方法をまとめて「発達特性に応じた指導・支援事例集」を作成する。それをもとに校内学習会を行うことにより、事例研究によって得られた効果的な指導・支援方法を全校の先生方に伝えていきたい。



- ・本研究において作成したチェックシートや指導・支援事例集を、センターホームページや研修会等を通して県内に発信できるように取り組んでいきたい。

これらの取組を通して、子供たち一人一人のニーズに応じた指導・支援の充実を図り、県内各校に広めていきたいと考える。

終わりに、研究協力校の校長先生・教頭先生をはじめ、事例研究に御協力いただいた学級担任や補助教員、支援員、特別支援学級担任、通級指導教室担当者等、関係の先生方には、貴重な実践と情報を提供していただきました。また、山梨大学の吉井勘人准教授、清水徳生客員教授、田中一弘准教授には、御指導・御助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

#### 【引用・参考文献】

- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(平成 24 年 12 月 5 日)通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/\\_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf)(令和 3 年 5 月 7 日)
- ・文部科学省(平成 29 年 3 月)発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン～発達障害等の可能性の段階から、教育的ニーズに気付き、支え、つなぐために～(本文)  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/13/1383809\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/13/1383809_1.pdf)(令和 3 年 5 月 7 日)
- ・文部科学省(平成 29 年 3 月)発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン～発達障害等の可能性の段階から、教育的ニーズに気付き、支え、つなぐために～(参考資料)③児童等の困難の状況の参考指標について(平成 24 年文部科学省調査質問項目より)  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/03/30/1383809\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/03/30/1383809_2.pdf)(令和 3 年 5 月 7 日)
- ・富山県総合教育センター(平成 31 年 3 月)子供のために先生が気づいて動けるチェックリスト  
[http://center.tym.ed.jp/wp-content/uploads/2019cl\\_full.pdf](http://center.tym.ed.jp/wp-content/uploads/2019cl_full.pdf)  
(令和 3 年 7 月 9 日)
- ・甲府市特別支援教育研究会(令和 2 年 11 月)学校生活チェックリスト(令和 3 年 7 月 15 日)

#### 【研究協力校】

北杜市立長坂小学校 校長 小尾 一仁

#### 【山梨大学連携・教育研究会アドバイザー】

山梨大学 准教授 吉井 勘人  
山梨大学 客員教授 清水 徳生  
山梨大学 准教授 田中 一弘

#### 【総合教育センター 研究アドバイザー】

研修指導課 課長 西室 直哉